

1. JFBP JAPAN MŪFORDÍTÁSI VERSENY

アイスクリーム熱

「まず冷たいこと。それから、甘いこと」
そんなの当たり前じゃないかというような顔で言うので、わたしはそのまま黙ってしまった。右目のわきに糸のような小さな傷がみえた。そうだよなと思った。アイスクリームは冷たくて甘い。

今は冬で、店の中は暖房が効きすぎていて窓ガラスや眼鏡が白く曇ってしまうほど暑かった。でも文句を言う客は誰もいない。わたしはイタリアンミルクとペーミンストスプラッシュをいつもとおなじようにカップに入れてショウケース越しに彼に手渡した。

どうしていつもカップなの。アイスクリームのなにが好きなの、というひとつめの質問につづけて尋ねてみた。彼はわたしの顔をじっとみて、邪魔だからと短く言った。じゃあコーンは何のためにあるのか知ってる？ 舌やすめ。そのとおりだったので、わたしはまた黙ってしまった。

彼がアイスクリームを買いにくるようになってその日でちょうど二ヵ月だった。わたしはひとめみたときから彼を好きになったので、はじまりのことは何もかもをちゃんと覚えているのだ。彼は二日おきに規則正しくアイスクリームを買いにくる。店で食べて帰ることもあればそのまま出ていってしまうときもある。前髪は目にかかるくらいに伸びていて黒く、背は高くもなく低くもないといった感じ。最初の日は紺色のくたつとしたパーカーを着ていて、そのつぎはノルディックのニット帽を目深にかぶっていた。足はまっすぐで、趣味のいい感じがして、いつも手ぶらだった。夕方の四時くらいに来て、いつもおなじものを注文する。

家に帰って夜になると、かちかちになった足の裏を親指でちからいっぱい押しながらわたしはその日にみた彼について覚えていることをすべて手帳に書きつける。少し意地が悪そうな彼の一重まぶたの目が好きで、でもそのよさをどうやって表現すればそれをちゃんと言い終わったことになるのかわからない。こういうときに比喻みたいなものがぱっと浮かぶといいのだけれど、わたしにはよくわからない。だから、切れ長の、とか、意地が悪そうなの、とかそういう何も言っていないのとおなじような言い回しでしか記録することができない。でもそれも悪くないなと天井をみながらそう思う。うまく言葉にできないということは、誰にも共有されないということでもあるのだから。つまりそのよさは今のところ、わたしだけのものということだ。

1. JFBP JAPÁN MŰFORDÍTÁSI VERSENY

彼もわたしのことを嫌いではないと思う。だって通りののはす向かいにもアイスクリーム屋があるのに（そっちのほうが人気がある）二日おきに買いにくるし、べつの女の子が空いていても何となくわたしに注文するし、一回につき一度はわたしの目をじっとみる。年齢も知らないし、仕事は何をしているのかも知らないけれど、ガラスの自動ドアを出てゆく彼の後ろ姿は淋しい夏休みの子どもみたいにみえる。つかのまの青い影のなかで横たわって、ひとりきりでじっとして動かない子どものような小ささがあって、誰かが帰ってくるのを待っているような、拒否しているような。あるいは、その両方をべつの誰かからされているようなものをまとして彼はいつも店を出てゆく。恋人はいるのだろうか。いても全然おかしくないけど、でも何となくいい感じもする。あるいはゲイだったりするのだろうか。でもそういうのって、どこで判断すればいいのかわからない。それにそんなことを真剣に考えているわけでもなんでもなくて、ただ思いついてみただけのことだ。そんなことよりもっと重要なことは、彼がいつもおなじものを食べているということ。賭けてもいいけど、このさき十年だって彼はアイスクリームといえなきゃとイタリアンミルクとペーミンストスプラッシュの組みあわせを食べつづけることができると思う。

今日は四時半で終わりだから、駅まで一緒に歩いて帰らないかとある日の夕方、誘ってみた。彼はわたしの顔をみて、少ししてからいいよ、と言った。並んで歩くと彼は思っていたよりも背が高かった。わたしがいつも立っているショウケースのこちら側は一段高くなっていていつも見おろす格好になっていたからわからなかったのだ。わたしは妙な上機嫌で目に見える物の表面を——ビルだとか看板だとか人の顔とかベビーカーとか道とか——そのすべてを塗りつぶす勢いであれこれしゃべりつづけた。彼はへえ、とか、うん、とか言いながらアイスクリームの盛りあがったところを舐め、ときどき顎をかたむけてカップのふちに垂れたのを舌のさきで丁寧にすくった。仕事は何してるの。家でする仕事。年はいくつなの。三十三。家は近くなの。駅の向こう。独り暮らしなの。そう。駅までの十分間のあいだに彼はわたしの質問にすべて答え、わたしには何も質問しなかった。

「アイスクリーム、わたし得意なんだよ」と嘘を言った。「何でもつくれるよ。冷凍庫さえあったら。もしよかったら大量につくってあげるよ」しばらくしてから、わたしの目をみないで、いいね、と彼は言った。その日はそのまま別れ、わたしは家に帰ってアイスクリームの作り方を調べた。アイスクリームを作ったことなんてこれまで一度もなかったし、お店にあるのだってできあがったものが朝運ばれてきてわたしたちはそれを売るだけだった。何と何を組みあわせればあんな形や色や味になるのか、始まりも終わり方もまるで見当がつかない。

1. JFBP JAPÁN MŰFORDÍTÁSI VERSENY

次の日も彼はアイスクリームを買いにきた。それからおなじように駅までの道を一緒に歩くことが何度かつづいたけれど彼は何も言わないので、わたしも何でもないような顔をして、いつ作りにいつてもいいの、と尋ねてみた。何を。アイスクリーム。ああ。いま食べてるからまた今度でいいよ。べつに今日食べなくてもいいんだよ。残しておけるんだよ。へえ。だから今日作りにいつてもいい？　しばらくしてから、彼はいいよと言った。

川上未映子「アイスクリーム熱」(『愛の夢とか』講談社、所収)